

令和6年3月22日

陸前高田市議会議長 及 川 修 一 様

産業建設常任委員会委員長 大 坂 俊

令和5年度 管外行政視察報告

産業建設常任委員会の管外行政視察の概要を下記のとおり報告いたします。

記

1 期 間 令和6年2月5日（月）から
令和6年2月7日（水）まで

2 行政視察地及び研修項目

- (1) 大阪府大阪市立阿倍野防災センター（あべのタスカル）
体験型施設の活用について（施設見学）
- (2) 株式会社陸水
陸上養殖について
- (3) 大阪府泉南郡岬町（人口 14,484 人 R6.2.1 現在）
陸上養殖に係る町の取組について
- (4) 市立伊丹ミュージアム
ミュージアムを活用したまちなかの活性化について

3 出席委員等 委員長 大 坂 俊 副委員長 伊 勢 純
委員 菅 野 秀一郎 委 員 小 林 卓
委員 及 川 修 一
随 行 高 橋 純 基（書記）

4 行政視察概要 別紙報告書のとおり

産業建設常任委員会行政視察報告

産業建設常任委員会は、大阪府大阪市、泉南郡岬町及び兵庫県伊丹市において行政視察を行いました。

○ 大阪府大阪市立阿倍野防災センター（あべのタスカル）

体験型施設の活用について（施設見学）

【概要】

「あべのタスカル」大阪市立阿倍野防災センターは、南海・東南海地震や南海トラフ巨大地震などの大災害に備えるため、自分の住む地域の特性に応じた災害危険を認識することで、自分に必要な知識や技術を選択し、体験を通じて学ぶことができる、体験型防災学習施設です。

1995年に発生した阪神・淡路大地震以降、関西でも東南海・南海地震の発生が危惧される中、地震をはじめとした大災害に対する、市民の防災知識と技術に対するニーズが高まっています。

そのような中、阿倍野防災センターは、広く市民の防災に対する知識と技術を総合的な体験を通して学習するために設立されました。

大阪市では、阿倍野区の阿倍野ハルカスの傍に、阿倍野防災センター「あべのタスカル」を開設しており、最新の技術を取り入れ、大人から子供まで年齢層に応じた、リアルで臨場感のある防災体験ができる施設となっていました。入場は無料となっており予約が必要との事でした。

体験学習は1時間程度のコースとなっており（コース時間や内容は希望によりセレクトできます）、一般的なコースは地震や津波の臨場感ある映画から始まり、（15分程度）続いて地震発生直後の室内に潜む危険を察知して減災する手段を学習、その後、液晶画面と連動した特殊な消火器を使って、てんぷら油火災の消火体験を実施しました。実際の消火器のように目標にうまく消火剤（ここでは光）が当たらなければ消えない仕組みになっていてリアルな体験ができます。

煙の中を実際に歩く体験もできます。（ここで使われている煙は人体に無害です。）震災後の街並みをリアルに表現したコーナーでは、落下物や二次災害の危険を体験することができ、ジャッキを使った人命救助の学習、プロジェクションマッピングを使って津波の体験ができます。

最後に震度 7 の直下型と海溝型の 2 種類の揺れも体験することができます。

他にも 119 番通報の要領や防災クイズなどいろいろ学習できるようになっています。

【所感】

委員会では、約 1 時間のコースを体験させていただきましたが、防災センターの中に再現された施設は、よりリアルで臨場感のあるものとなっており、リアルな体験ができることを考えれば、本市に残る震災遺構とは別の意味で、大きな価値があることと感じました。

視察当日には、小中学生のグループやインバウンドで訪れた方々など、多くの人たちが体験学習に参加しており、他にも多くの市民が訪れておりました。

防災センター「あべのタスカル」は、大きな集客効果があり、阿倍野ハルカス周辺地区のまちなかの活性化に大きく寄与しており、施設の活用のあり方のヒントとなる視察ができたと感じております。

○ 株式会社陸水

陸上養殖について

【概要】

(株)陸水では、大阪府泉南郡岬町においてトラフグ、トラウトサーモンの陸上養殖を実施しており、圧倒的鮮度、人工種苗×配合飼料の使用、抗生物質の不使用、輸送費削減×脱炭素への取り組み、フードロスの削減、産業廃棄物削減、海洋プラスチック削減などをテーマとして自社の強みをアピールしており、高効率な配合飼料を使用する事で、残餌・排泄物を最小限まで削減させます。また、地下海水をくみ上げて水槽にかけ流して、飼育水を殺菌・徹底管理する事により魚病の発生要因を元から断つ事で、抗生物質に頼らない養殖が可能です。

事業地は、大阪市中心部まで車で 1 時間の距離にあり、必要な時に必要なだけ新鮮な魚を用意することが可能で、過剰な在庫を抱える事がなく、魚が廃棄される事が防げます。

飼育施設に漁網・ロープ・発砲フロートを使用しておりませんので、海洋プラスチックを排出せず、水槽素材にリサイクル可能な P P (ポリプロピレン) 整を使用して、産業廃棄物の削減に努めております。

現在ではクエの養殖も始めて、岬町の陸上養殖クエとしてブランド化にも取り

組んでいる、とのことでした。

【所感】

事業所は、淡輪漁港の敷地内にあり、淡輪漁協の倉庫を借り受け、そこに直接井戸を掘り地下海水をくみ上げてかけ流ししており、飼育水の管理については清掃や水質管理にはほとんど手がかからないことがメリットであるとの説明がありました。デメリットとしては、水槽や海水循環のための初期投資が大きくなることが挙げられました。

本市においての陸上養殖の可能性を探るうえでは、初期投資への対応や消費地との距離を考慮したうえでの配慮が必要になることと考えられますが、可能性を探るうえでは参考となるものが多かったと感じられました。

○ 大阪府泉南郡岬町

陸上養殖に係る町の取組について

【概要】

岬町は、大阪府の最南西端で、大阪市の都心部まで概ね 50 km、電車で 50 分、和歌山市の中心部までは概ね 10 km、電車で約 10 分の距離にあり、消費地までのアクセス状況や、大阪湾、紀伊水道などの良好な漁場に恵まれていることから、(株)陸水他、複数の養殖業者が立地し、活魚養殖を展開して水産振興に取り組んでおりました。

そこで、(株)陸水が陸上養殖事業を始めたことによる岬町への、雇用、経済効果等の地域への影響や業者との関わりについて視察・調査を行いました。

町担当課の説明によると、雇用や経済効果などの具体的な数値は算出してはいないが、地元漁協と連携して、大阪都市圏の飲食店等にフグやサーモンを出荷して好評を博しており、今後も新たな拡大事業をスタートさせたことから、今後の雇用について、大いに期待できるものと考えている。

(株)陸水が養殖しているフグやサーモンは、大阪府の認証制度である「大阪産もん」にも認定されており、「大阪産もん」を取り扱う料理店や、魚の産直販売が人気の道の駅「みさき」においても販売されていることから、岬町の特産品として徐々に認知されるとともに、町の PR にもつながっており、町の漁業振興に好影響を与えていると考えている、との説明がありました。

担当課では、(株)陸水と定期的に情報交換を行い、都市部で開催されるイベン

トなどの出展に協力いただいております、岬町開催のビジネスプランコンテストにおいて最優秀賞を受賞し、大阪府のビジネスプランコンテストでも入賞していることが紹介されました。

【所感】

道の駅「みさき」では、近隣の漁場や(株)陸水などからの豊富な魚種、そして新鮮な鮮魚が並び、水産物コーナーが大きなスペースで展開され、(株)陸水の新規事業の高級魚「クエ」の販売予告ののぼりを立ててPRを展開しており、岬町、道の駅、事業者の連係でのブランド化の意気込みが感じられました。

また、岬町は、平成29年に第二阪和国道が全面開通され、大阪、和歌山、淡路、四国の結節点のまちとして広域経済圏の活性化への寄与が期待されているとの事であり、そこに開駅された道の駅では広域の魚介だけではなく、和歌山県の柑橘類やキノコなどの農産物も豊富でありました。

そして、道の駅の指定管理は和歌山県田辺市の組織であるとの事であり、岩手県の最東南端に立地する陸前高田市の今後の県際交流のあり方の可能性を示しているものとも感じられました。

○ 市立伊丹ミュージアム

ミュージアムを活用したまちなかの活性化について

【概要】

市立伊丹ミュージアムは、伊丹市立博物館機能移転複合化事業を含むみやのまえ文化の里再整備事業基本計画に基づく大規模改修工事の後に、博物館を加えた市立伊丹ミュージアムとして、令和4年4月22日にグランドオープンしました。

みやのまえ文化の里は、美術館、工芸センター、伊丹郷町館（旧岡田家住宅、旧石橋家住宅、新町家）に、（公財）柿衛文庫を加えた文化ゾーンの愛称であるとの事です。

ミュージアムの基本テーマは、「酒と文化の薫るまち」とし、伊丹の誇りである酒と文化の系譜を引き継ぎ、個性ある各施設の機能連係により、訪れる人に多様な学びと体験を提供することであり、果たすべき役割は、「歴史、文化、芸術の総合的な発信拠点」として、さらに、実現したい未来は、「芸術文化がつなぐひととまち」となっており、ミュージアムをきっかけに、ヒト・モノ・コトがつながることで新たな可能性が引き出され、さらなるまちの活力・魅力を生み出すことと

しております。

ミュージアムのみどころは、アトリエ、歴史展示室の増築等、旧岡田家住宅、旧石橋家住宅、日本庭園、クラフトショップなど、美術、工芸、歴史、俳諧などの多彩なジャンルの各施設であり、事業を推進することにより、市民の教養の向上、並びに芸術文化の振興を図るとともに、まちの賑わいの創出に寄与することを大きな目的としております。

また、事業の連係コンセプトを「TSU・NA・GU～つなぐ～」として、ミュージアムの魅力向上を図るとともに、中心市街地のにぎわいを創出することを目的としておりました。ミュージアムをきっかけに、ヒト、コト、モノなどがつながることによって新たな可能性が引き出され、さらなるまちの活力・魅力を生み出すことにつながっていくこととなります。

現在の周辺商店街などとの関係性や連携については、市立伊丹ミュージアムを含む5つの施設を対象として市内30店舗が参加した「寄ってトクする伊丹さんぽ」を行い、対象施設の展覧会鑑賞者や講演のチケット購入者にクーポンを付与して、参加30店舗の割引特典付きお得クーポンを配布してまちの活性化に寄与しております。

さらに、市立伊丹ミュージアムを中心として、江戸時代からお月見と並んで庶民の間で親しまれていた「虫聴き」を現代風にアレンジした「鳴く虫と郷町」を展開し、伊丹のまち全体で虫の音と秋を愛でる10日間を開催し、音楽ライブや手づくり体験などの関連イベントも企画しているようです。

また、伊丹市、尼崎市、西宮市、芦屋市、神戸市に点在する酒造業の文化が開花した伊丹と灘五郷をめぐるスタンプラリーを開催するなど、多くのイベント交流事業を展開し、まちの活性化の核となっているとの事でした。

【所感】

伊丹市において、歴史文化芸術の発信拠点としての市立伊丹ミュージアムが、街の活性化の中心となってまちづくりに多大な寄与をしている事は、驚きの思いをもって、各施設を視察させて頂きました。

一般には、博物館を含むミュージアム等については、教育委員会の所管のもとで歴史文化の保存としての一面が強く、文化財及び文化施設の街の活性化への活用には、ハードルの高いものと思われましたが、伊丹市においては、公共施設及び

文化資源を見事にまちづくりに融合させ、活用、運用が成されていることに驚きを感じさせられました。

その答えと思われるものが、説明者の担当課長の名刺にありました。課長の役職は、「都市活力部 まち資源室 文化振興課」とありました。

さらに、市立伊丹ミュージアム開館までの「伊丹市公共施設等総合管理計画」の関連年表には、公共社会教育施設を首長部局へ移管し、博物館の設置管理権限を市長部局へ移管、とありました。

この事は、公共社会教育施設及び文化施設を教育委員会所管と固定せずに自治体全体としての命題と捉え、まちづくりへの活用を促すための組織改編が大きな意味を持ったものと思われ、陸前高田市の歴史文化の活用のヒントとなりうるものと感じました。